

母塾

2019・5・15

VOI-18



新小岩幼稚園・未就園児クラス

『 時間をあげるということ 』

アドバイザー 猪之鼻晴子

母の日に気づいたこと。
特に今年も6人の子どもたちから労いや感謝の言葉はない。
18才の次女がバイト代から花束を買ってくれた。
産んだことも、育てていることも子どもとは感謝しないものだと思う。
たまたま三男が使っていない10年前のカメラを見つけた。
充電して古いビデオを見て大笑いしている。
声変わりをしていない時の次男の声が高いと笑っているのだ。
そこには忘れていた日常が写っていた。
取り澄ました顔ではなく、ふざけた子どもたちが写っている。
通りすぎる私はやっぱり洗濯物を持っていた。
ビデオを見て、「ああ、またこの中に行ってみたいな、タイムマシン出来るかな？」
と言ったら次女が「ママも懲りないね。好きだね。」と言う。
そうか。好きだったんだ。戻ってみたいくらい好きなことして来たんだ。

人は本来は時間やお金や物をくれる人に感謝すべきだ。
しかし、反対に自分が時間・お金・物をあげた人ほど好きになってしまうものだ。と聞いた。
自分の限りある持っているものを何に使うか、誰に使うか。
結局、自分が時間をかけたことは正しかったのだと思いたいのかもしれない。
「時間を取られた」と思うことほど後になって記憶に残っている。
「手がかかった」と思うものほど捨てられない。

子どもと暮らすということは、時間とお金と労力がかかる。
毎日くりかえし時間をあげている。
見返りもなく、感謝もされない。
それでもどうして続けるのだろう。
「好きだからやっているんでしょう」と子どもに言われるだろう。
時間をあげられる対象があることに感謝するのは私の方なのか。
母の日は母に感謝する日でもあるが「ママをさせてもらってありがとう」と気づく日でもある。
たいしたことできない私が家でいばっていられるのも「ママ」という役をもらっているからだ。
自分で花束でも買って帰ろうと思う。
懲りずにやっているな、と自分にカーネーションをあげよう。

harukoinohana1717@ezweb.ne.jp